
伯爵

一言 真

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伯爵

【コード】

N6410E

【作者名】

一言 真

【あらすじ】

吸血鬼の『伯爵』を描いた小説。

石棺の中は、蓋の隙間からわずかに差し込む光によって薄く照らされている。

硬い表面に背骨が当たって少々痛い、棺の中は涼しく、私の肌に合わせている。

ローブの袖から伸びた腕に、平らな石のざらついた感触がまとつく。素肌を晒した足首にも、同様の感触がある。

私は、ローブを羽織った長軀を棺に横たえたまま、右手を棺桶の蓋の裏へ伸ばし、その石の表面につける。そのまま手の平を上下にさすり、へこんだ部分を探し出した。

そこに人差し指と中指を重ねて突き入れると、爪先が底へ当たる。私はそのまま右腕を下げ、蓋をずらしていく。ちょうど顔の上に、そこから頭を出せるほどの隙間ができ、灰色の天井が高くに見える。石造りのその天井には、細い溝が縦横へ走り、大きな正方形の、タイル模様を浮かべている。

全面灰色だが、時の経過による染みが入り、青っぽい灰色や、どす黒い斑点など、愛着のある模様を浮き出している。

私は、蓋をさらにずらしていき、手が腰上までくると取っ手から引き抜いて、蓋の上端に当てて、押していき、腿の上へくると手を離した。

起き上がる。その拍子に、めくれていた長い前髪が、目の上に落ちてかぶさった。それを、右手で左右へ払う。それから、耳を覆う髪をそれぞれの手で掬い、さらに、両肩にかぶさった長髪に手の甲をあてがって、背中へと垂らす。そして、辺りを見回した。

茶色に塗られた石床。ごつごつした白い石壁。別段装飾のない、広い石室には、天井際に鉄格子の窓がある壁に寄せ、棺桶が、周囲に余裕を持たせ、配されていた。

この石室にはいささか小さく感じられる入り口の先には、夕陽の

光が照りつける廊下があった。その窓から、外の、窓際に生えた、卵の形に刈られた植木の、濃い緑の色彩が目につく。その先に庭の薄茶の地面が見え、さらに先の段差下に、曲がりくねった坂道が続いている。道を越えた先には草原、その奥には崖があり、そこから麓の街が小さく見える。

私は、腿の上にある蓋に手をつき、立ち上がった。身体の右横の棺の縁に左手をかけ、右足で縁を跨ぎ、床へ下りる。左足も跨ぎ、棺の右に立つ。

それから、突出した蓋の横に移動し、それを押して、蓋を縁の上に合わせる。

棺の横の床は、格子窓から差した光に、白くくり抜かれていた。その白い平行四辺形の並列をじつと眺めた後、向きを変え、入り口へ歩き出した。

戸口で立ち止まり、横長に続く廊下の、正面の窓を見ると、長い黒髪が腰で揺れる、白いローブ一枚をまとった長身の男。私が映っていた。彫りが深い顔の、直線的な眉と茶色の瞳との間は狭く、細長い高鼻をしている。薄い唇は形が良く、肌は異様に白かった。非常に美しく、神々しささえ感じる顔。

廊下の左へ首を向けると、その先は窓がない為に薄暗く、奥は突き当たりで、そこから左へ曲がっている。

右を向けば、連なる窓から陽射しが明るく差していて、廊下の先に、開け放たれた木扉があり、庭へ続いている。

私はじつと右を見た後、ふっと視線を外し、左へ向いた。

薄暗い奥へと歩き出す。背後から、庭の風が吹いて来て、私の長い髪を白いローブの背の上で揺らし、分けた前髪の端が、ふわりと浮く。

私は目を閉じ、優しく撫でていく風を味わいつつ、微笑む。瞼の裏に、夕暮れの光が、赤く映る。しかし、それがふと消えた。

目を開け右を見れば、窓はなく、薄汚れた白い壁紙が目映る。

私は正面に向き直り、暗い奥へ目を凝らす。

「カレーン」

一声呼ぶと数秒後、突き当たりの壁に、細い隙間が開く。隠しドアが開かれ、暗室から人影が出てきた。

薄暗い廊下の角に、金の短髪を肩に乗せた、細長い体軀たいくが正面を向く。

私は微笑み、近づいて前へ立つと、屈んで頬にキスをした。

口を離し、その無表情な顔の間近で、「おはよう」と囁く。すると、おはようございます伯爵、と琴のように透き通ったよく響く声で、返してきた。

私は、曲げた背を伸ばし、彼女を見下ろした。短い前髪の下で、薄い眉がなだらかに曲がり、黄金の瞳は二重瞼ふたえまぶたに縁取られ、外界へはつきりと開かれている。美しいと感じた。

彼女は茶褐色の肌に、私と同様白いローブを着て、それは華奢な身体には割合大きく、手首は隠れ、足裾を引きずっていた。

私は、胸の高さにあるその頭に右手を置き、少し湿った柔らかい髪を確かめつつ、手を左耳の方へ滑らせ、うなじを撫でた。そして、親指だけ離し、耳たぶにつけ、それを優しく押しつけて髪につける。

カレーンは、私を見上げる無表情なその顔を、ふと微笑ませ、うなじへ伸ばした私の手首を、そっと右手で掴んだ。

「行こうか、カレーン」

微笑み小さくつぶやくと、彼女はその優しい笑顔を黙って頷かせた。

正面から吹く強い夜風に、私の長い髪ははためき、頬を無数の毛先が撫でる。

腕を広げる。ワイシャツの胸元が張った。ボタンの外された襟へ風が涼しく滑り込み、汗に湿った首元が乾いていく。

革靴の裏中央に、鉄がめり込むのを感じる。私は、高い外灯の上立っていた。

屋敷を別々に出た私とカレインは、里山にある自然公園の、麓の街を展望できるこのひと気のない場所で、七時に待ち合わせをしている。崖の前に張られた長い鉄柵近くに、外灯が間を開けて並び、側に望遠鏡の台があるその内の一つの頂点に、私は立っていた。

外灯の鉄柱の上端には、側面にガラスを張った、クラシクな鉄籠が点り、上から見ると正方形の籠の鉄蓋に、私は両足を立てている。

私は、淡い光を散らせた街の夜景を觀賞する。斜め右に、塔らしき細長い建物が見え、その上端に、一層細い塔が生え垂直に伸びている。その生え際の下に、丸時計が掲げているのが微かに見える。

私は腕を下ろし、下を見下ろす。崖下の道路の片側に走る、レンガを敷いた歩道に落ちた塵を、ガス灯が薄く照らしている。

眺めた後、再び頭を上げて腕を広げ、革靴をV字に開かせる。夜風に吹かれ、黒いスーツパンツの足裾が、足首前に張り付き、後ろへそよぐ。

唇を尖らせ短く息を吸うと、瞬間、口内が涼しくなる。

斜め左へ視線を伸ばすと、ちょうどダンスホールのある、一際明るい通りが目に入る。無数のヘッドライトが絶えず行き交い、鈍く煌く。

褐色の建物が、スポットライトに薄黄色に浮かび上がり、大理石を敷いた玄関をぼつぼつ人影が通っていく。

私は、左足を伸ばして宙に浮かせ、そのまま右足を軸に、一回転して後ろを向いた。

景色が移り変わり、公園内の鬱蒼うっそうと茂る木の下をこちらへ真っ直ぐ伸びる道が見え、その中央にドレスをまとった人影がある。と同時に、私はバランスを崩し背中から倒れ、右足裏が外灯の鉄蓋の上を滑る。赤い人影が視界から消えた。

私は「先に行って待っていてくれ」と大声を上げ、宙へ投げ出されつつ、外灯の鉄籠を靴底で蹴った。

柵を越えた身体は崖を背に、天地を逆に垂直に落ちていき、青い夜空の上に白い帯が見えたと思うと、さらに逆さの黄色い街が天上に広がった。

長い髪を垂直に立てて落下しつつ、私は腕を組んで静かに目を瞑り、風の力強い奔流を全身に受ける心地良さに、微笑んだ。

駐車場を囲んだ、低いレンガの塀を迂回する。塀の植え込み越しに、ダンスホールの褐色の建物の上半分が見える。

横長の建物で、玄関がある中央だけが突出し、その上には、暗いコバルトブルーの空が広がっていた。

この狭い歩道の横の大通りには、多様なエンジン音が絶えず響いている。すぐ横の車線を通った黒いクラウンの、助手席の窓から、スムーズジャズが聞こえてきた。

私は左へ向き、車が後ろへ過ぎ去るのを視線で追う。車内のシートは、街灯の光に淡く染まり、助手席の先に、ハンドルを握む紺のスーツの腕が見えた。他には誰も乗っていないらしかった。

トランクを見せる距離まで車が離れると、私は視線を外し、前へ向き直る。そこで植え込みが途切れ、敷地への幅広い入り口が現れた。

その時、入り口の先の歩道にリムジンが停車し、白い手袋をはめ、鍔のある黒帽と黒いスーツを身に着けた初老の運転手が降りてきた。彼は歩道へ上がり、後部座席のドアを腰を曲げながら開き、取っ手を掴んだままじっと佇んだ。白いドレスの、美しく若い女性が降りてきた。

コンクリートの地面に、輝石きせきを散りばめたシルバーブルーのヒールが、高い音を響かせて立つ。

ドレスは胸元がわずかに開いており、また、背中すその薄い生地から綺麗な肌が透けて見える。足首を隠す裾はレースになっていて、短い袖から伸びた腕は細く、ドレスに溶け込むような白い肌をしていた。

女性は運転手へ軽く頭を下げ、こちらへ向いてゆっくりと歩き出した。

私も、止めていた足を出す。入り口脇の、外灯の下に出た私は、

向かい側の外灯に照らされ浮き上がった女性の姿を眺める。

手入れされた細い眉毛に、小さな鼻。深い黒の大きな瞳が瞬きし、女性は顔を褐色の建物の方へ向け、唇を微笑ませている。

長い黒髪を後ろで巻いて金のかんざしを差し、残った髪がうなじから垂れ、風に柔らかく揺れている。

私と女性は入り口に端から踏み入り、歩きながら徐々に道の真ん中へと寄っていく。互いの距離が縮まると、左にいた彼女がこちらへ向いた。目が合うと、彼女は口元から微笑みを消し、瞳を見開かせて、じつと見てくる。

私が見下ろしつつ微笑むと、彼女は唇を少し開いて眉を上げ、すぐに正面を向いてしまった。長いもみ上げに縁取られた彼女の耳が、ほんのり赤くなる。

私は微笑んだまま、彼女から視線を外した。

建物の玄関へ一直線の、この道の左右を、低く白い大理石が縁取り、この枠は建物前で直角に曲がっており、内には玉砂利が詰められている。

前方へ目を凝らすと、左右に小さなスポットライトを並べた、黒い大理石の幅広く低い階段の先に、同素材の床が玄関へ続き、その両端に大理石の低い塀が立っている。

玄関の左右に、長方形の縁の噴水が一つずつあり、噴水の中央に水柱が垂直に高く浮き、その両脇に小さな水柱が寄り添う。大理石の縁から溢れた水は、砂利の詰まった小堀へ流れ、その堀をさらに縁が囲んでいた。

噴水と階段の隙間の奥に、大きなスポットライトが外壁へ向けられて、それは壁に沿って並べられ、建物が黄色く浮かんでいる。

石造りで外壁は褐色、窓はなく、非常にシンプルなデザインの建物だった。

近づいていくと、玄関右の噴水前で、こちらを向いて佇む赤い人影に気付く。カレオンだった。

ストレートのショートヘアの、金髪の左端だけが、外壁に並ん

だスポットライトの光に輝き、髪先は、肩の上で柔らかく折れ曲がっている。表情は影になつて見えなかつた。

赤いドレスは、胸元から上を露出させ、きゃしゃ華奢な肩から細くしなやかな腕が伸び、細い腰の脇わきで垂れている。サイズのぴったりな生地が太ももに張り付き、スタイルの良さを強調している。

私がカレーンに微笑みつつ近づくと、彼女は銀色のサンダルの先を光らせ、ヒールの音を鳴らし、二歩進み出る。

横で歩いていた女性は、私達へ顔を向けながら、階段へ歩み寄る。カレーンの顔が微笑んでいるのが解る距離になると、彼女は右手を自身の茶褐色の顔へ伸ばし、右眉の上の前髪を、手の先で横へ払いのけた。

彼女の茶色の大きな瞳が、私の顔を映してゆっくりと瞬きしている。彼女の前へ立ち見下ろすと、彼女は私を見上げ、首を左へ少し傾けて、なだらかに曲がる薄い眉を上げて微笑み、顔をじつと眺めてくる。

ヒールの底が大理石を叩く音が聞こえ、視界の左隅に、階段を登る女性の姿が映る。

彼女はドレスの太ももの部分を掴んで裾を少し引き上げ、足元へ目を落としてつつ、何度も顔を上げては、ちらりちらりとこちらを見る。

視線を前へ戻すと、カレーンがふと顔を下げ、私の黒いパンツスーツを見つめた後、膝を折って屈んだ。

私の膝を見ながら、パンツの右ポケットへ左手を入れてまさぐり、入っていた赤いハンカチーフを取り出して右手に持ち、私の右の膝小僧を拭いた。

上から下へ拭いては離し、それを無表情で何度か繰り返した後、彼女は微笑んでハンカチーフを折り畳み、視線を私のワイシャツの胸の辺りに当てつつ、私の腹の前に差し出した。

私は微笑んで「ありがとう」とつぶやき、右手で受け取ってポケットへ滑り込ませた。

カレインは、尻に両手を当てて立ち上がり、私を見上げて目を細め、「どういたしまして」と、声を辺りに響かせた。

私は視線をふと、玄関へ向けた。階段がスポットライトによって光沢を放ち、大理石の塀^{へい}は玄関から漏れる光に煌^{きら}いている。

玄関には、銀色の金属縁で、ガラス張りの自動ドアがある。ガラス越しに、ロビーで談話している、正装した男女二組が見えた。

ふと、ロビーの隅で、先ほどの白いドレスの女性がこちらをじつと見ているのに気付いた。彼女は、私が顔を振り向けると、肩を跳ね、すぐに背を向けて、金のかんざしを光らせつつ奥へと歩いていってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6410e/>

伯爵

2011年10月5日02時53分発行